

# 昭和 10 年、 下呂に何が起こっていたか ～ブルーノ・タウトの旅日記抄から～

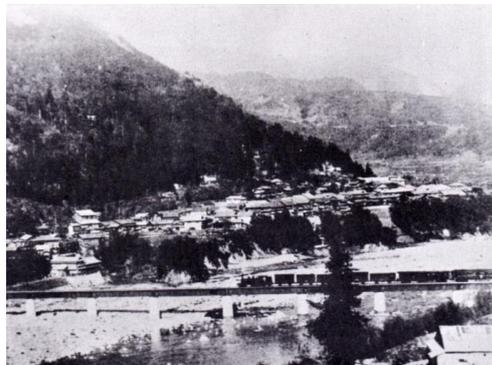
第57回ふるさと講座

昭和の初めの高山線全線開通は、益田川沿線の町々を急速に変化させていきました。下呂は温泉観光地として新たな旅館が建ち、街並みも大きく変わろうとしていました。また、小坂、萩原、金山でも木材など地場産業の発展の大きな契機となりました。

開通の翌年 1935 (昭和 10) 年 5 月、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトが下呂駅に降り立ちました。現在では全国的にも常にランキングの上位に入る大人気の温泉地となり、年間 100 万人を超える宿泊客を迎える下呂温泉ですが、その当時のタウトが街に対して抱いた印象はどのようなものだったのでしょうか？ それ彼の旅日記抄『飛騨から裏日本へ』(岩波新書『日本美の再発見』に収録)に書かれており、私たちにとってはたいへん興味深い内容となっています。

この本は 1939 (昭和 14) 年に出版されて以来、版を重ねて通算 26 万冊が出版され今も多くの読者を持っています。

タウトは下呂に何を見たのか(また何が見えなかったのか)を当時の町の写真を見ながら考えると、タウトの言葉に気付かされることがあるかもしれません。



## 10/8 (日)

13:00 開場 13:30 開講

入場無料・先着 60 名限定

予約制：電話予約をお願いします

下呂交流会館 25-5000 (水曜休館)

講師：東上田誌編集委員会事務局長

遠藤 卓 氏

会場：下呂交流会館マルチスタジオ

\*会場内ではマスクの着用を推奨いたします

### ■ 講師のプロフィール 遠藤<sup>たかし</sup>卓 氏 下呂市東上田在住

「考える地域史」「グローバルな地域史」を目標に、益田人(ましたびと)の現在に、そして将来に繋がる地域史の発掘・調査・研究などを行っている。

・東上田誌編集委員会事務局長 ・下呂市文化財保護巡視員 ・下呂フォト倶楽部主宰

主催：一般財団法人下呂ふるさと文化財団